様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月　 １ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０３７９８

研究課題名（和文）イギリス帝国におけるスコットランド人の役割：グラスゴー西インド協会を事例として

研究課題名（英文）The roles of Scots in the British Empire: The case of the Glasgow West India Association

研究代表者
熊谷　幸久（Kumagai, Yukiihisa）

関西大学・経済学部・准教授

研究者番号：２０５７０２５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、19世紀初頭にスコットランドのグラスゴーの西インド貿易商人・プランテーション経営者によって設立されたグラスゴー西インド協会の活動について調査をおこない、（1）従来論じられてきた奴隷制度廃止問題以外にも、同協会は西インド貿易に関連する様々な問題に対応していたこと、（2）東西両インド産砂糖に対する関税の均一化問題において、同市の西インド利害関係者と東インド利害関係者の双方が政府や議会に対して積極的にロビー活動をおこなったこと、（3）1830年代に至ってもグラスゴーでは、西インド利害関係者が地方政治や商工業界において大きな影響力を保持していたことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年のイギリス経済史・帝国史研究に大きな影響を与えた「ジェントルマン資本主義論」においては、帝国内のスコットランドの役割が過少評価されてきた。これに対して、本研究は、19世紀前半のグラスゴーの西インド利害関係者や東インド利害関係者の政府や議会に対するロビー活動を明らかにすることで、スコットランド人のイギリスの通商・帝国政策に対する貢献を主張する。

研究成果の概要（英文）：This research has explored the activities of the Glasgow West India Association (GWIA), which was established by the group of West India merchants and planters of Glasgow. The research results include (1) the GWIA engaged in not only the debates on the abolition of slavery, but also a number of other subjects related to the West India trade,(2) in the debates over the equalization of the duties on West-India and East-India sugars, both the West India interests and the East India interests in Glasgow actively lobbied government officials and politicians, and (3) in the 1830s, the West India interests still held strong influence on the local politics and business community in Glasgow.

研究分野：イギリス経済史

キーワード：グラスゴー　西インド貿易　砂糖関税　スコットランド　イギリス帝国

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

近年のイギリス経済史・帝国史研究に大きな影響を与えたＰ．ケインとＡ．Ｇ．ホプキンズの「ジェントルマン資本主義論」とそれに基づいた研究においては、伝統的に産業革命を通して経済的影響力とともに政治的発言力を強めることに成功したと考えられてきた北部工業地帯の利害関係者のイギリスの帝国政策に対する影響力を低く評価する。その一方で、土地貴族やロンドン・シティの金融・サービス利害を中心に形成された「ジェントルマン資本家」層の影響力を強調する傾向がある。さらに、このモデルでは、ロンドンのシティを中心とした視点からイギリス経済史・帝国史を論じることによって、帝国におけるスコットランドなどのイギリス国内のケルト圏の貢献が過小評価されている。

これに対して、Ｍ．フライやＴ．Ｍ．ディヴァインなどのスコットランド人研究者たちは、移民、植民地経営、商業活動、軍務などを通して、スコットランド人がイギリス帝国の形成に対して大きな貢献を果たしていたことを強調する。加えて、本研究の主要な研究対象であるグラスゴー西インド協会に関しても、Ｉ．ホワイトの研究によって、19 世紀前半のイギリスにおける奴隷制度廃止問題に関する議論の中で、ロンドン以外の最も強力な西インド利害のロビー団体として、奴隷制度の維持を擁護する活動を積極的におこなったことが明らかになっている。このロビー団体を組織していたグラスゴーの西インド貿易商人・プランテーション経営者の各々の活動に関しても、従来の見解についての再検討が近年進められており、かつて考えられていたような同市にとっての西インド貿易や西インド諸島におけるプランテーション経営の最盛期である 18 世紀末から 19 世紀初頭の時代を越えて、19 世紀半ばに至るまで経済的影響力を行使することができたというＡ．クックのような研究も出てきた。

さらに、近年のグローバル・ヒストリー研究の興隆の中で、インド産綿製品を介した東インド貿易と西インド貿易とのつながりを強調するような、より広い視点からの研究も出てきている。本研究担当者も、大学院博士課程の時代から、19 世紀初頭のグラスゴー商工業者による東インド貿易開放運動に関する研究をおこなっており、1812～13 年の東インド貿易開放運動に、多くの西インド貿易商人が参加していたことに注目をしていた。

以上のように、イギリスの帝国形成におけるスコットランド人の役割だけでなく、西インド貿易と東インド貿易とのつながりについても、近年、見直しが進められており、これらについて、いっそう明らかにされる必要があると考えられる。

２．研究の目的

本研究の目的は、スコットランドのグラスゴーを拠点とした西インド貿易商人とプランテーション経営者を中心に組織されたグラスゴー西インド協会の活動を明らかにするとともに、彼らが同協会の活動を通して、19 世紀前半のイギリスの通商政策ならびに植民地政策に対して、どの程度政治的影響力を行使することができたのかを検討することである。また、グラスゴー西インド協会とその構成員の活動が、イギリスによる西インド貿易や西インド諸島植民地の経営だけでなく、アジアなどの他の地域における通商・帝国政策に対しても、どのような影響を与えたのかについても明らかにする。

３．研究の方法

本研究では、グラスゴー・ミチェル図書館やグラスゴー大学図書館に所蔵されているグラスゴー西インド協会の記録や同協会に属した西インド貿易商人・プランテーション経営者に関連する資料を利用しながら、同協会のロビー活動を明らかにする。また、イギリス議会の議事録や大英図書館などに所蔵されている有力政治家の書簡を調査することで、同協会のロビー活動がイギリスの通称政策に対してどのような影響を与えたのかについて検討する。

４．研究成果

（１） グラスゴー西インド協会の活動期間と活動内容

近年のＩ．ホワイトやＳ．ミューレンによる研究においては、1820 年代から 30 年代の初めにかけてのイギリスにおける奴隷制度廃止に反対した主要団体の１つとして、グラスゴー西インド協会の活動が論じられてきた。しかしながら、この時期の奴隷制度廃止ならびに奴隷所有者に対する補償の問題は、1807 年に設立されてから第 2 次世界大戦終了直後までの約 140 年間にわたって存続したグラスゴー西インド協会が取り組んだ数多くの問題の１つに過ぎなかった。本研究によって、奴隷制度廃止問題以外にも、東西両インド産砂糖に対する関税の均一化に関する問題や、ナポレオン戦争時にイギリスが自国の貿易船を保護するために組織した護送船団についての問題など、西インド貿易に関する様々な問題に同協会が対応していたことが明らかになった。

（２） 東西両インド産砂糖に対する関税の均一化問題を事例としたイギリスの通商政策の形成におけるスコットランド人の役割

本研究代表者の過去の研究では、1812 年から翌年にかけてのグラスゴーにおける東インド貿易の自由化を求める運動において、西インド利害関係者が主導的な役割を果たしただけでなく、規制緩和による東インド産品の輸出拡大が従来の西インド産品にとって脅威にならないように配慮することを要求し、最終的に東西両インド産砂糖に対する異なる関税率の適用として実現したことを論じた。さらに、その後、東インド貿易に実際に参入した西インド利害関係者の数は限定的であったために、彼等と東インド利害関係者の利害が次第に乖離していったことも明らかにした。それを踏まえて本研究では、1820 年代から 30 年代にかけての東西両インド産砂糖に対する関税の均一化問題を事例としながら、当時のイギリスの通商政策の形成におけるスコットランド人の役割を明らかにした。

先ず、1810 年代後半以降になると、グラスゴーの西インド利害関係者による東インド貿易の自由化に対する支持が見られなくなった。そして、1820 年代に入るとイギリスでは、東インド産砂糖の輸出の拡大を危惧する西インド利害関係者が、東インド産砂糖に対する課税強化を求めるようになり、グラスゴー西インド協会も、イングランドのロンドンやリヴァプールなどの西インド利害関係者と協力しながら、政府や議会に対するロビー活動を行った。逆に、リヴァプールなどの東インド利害関係者は、西インド産砂糖を東インド産砂糖よりも優遇する差別的な関税を修正するように求める様々なロビー活動をおこなった。その一方で、グラスゴーの東インド利害関係者の動向に関しては、彼らの利害を代表するロビー団体が存在しなかったこともあり、特に目立った活動は見られなかった。しかしながら、1829 年のグラスゴー東インド協会設立により同市の東インド利害関係者が組織化されたことをきっかけとして、東西両インド産砂糖に対する関税の均一化を求めて、大蔵卿委員会や議会などに対する積極的なロビー活動が行われるようになった。また、グラスゴー東インド協会においても、西インド利害関係者によるロビー

活動と同様に、より効果的なロビー活動をおこなうために、イングランド各地の東インド利害関係者との連携が見られた。

（3） グラスゴーにおける西インド利害関係者の影響力

18 世紀末から 19 世紀初めにかけてのグラスゴーは、イギリスにおける西インド貿易の中心地の一つとなったことで、同市の西インド貿易商人・プランテーション経営者が、経済的だけでなく政治的にも大きな影響力を持ったことが良く知られている。本研究では、1810 年代後半以降、イギリス領西インド植民地経済が慢性的な不況に陥り衰退していく中にあっても、1830 年代に至るまで、グラスゴーの西インド利害関係者は、地方の政治や経済に対して大きな影響力を保持し続けたことを明らかにした。例えば、1830 年の下院選挙の際にクライド・バラ選挙区で立候補したカークマン・フィンリイは、グラスゴーにおける最も有力な東インド貿易商人であり、一般には西インド利害関係者と対立する東インド利害の代表者として見られていた。そして、選挙においては、最終的に西インド利害と深く繋がっていた対立候補のアーチボルト・キャンベルに僅差で敗れることになった。また、グラスゴーの商工業界全体の利害を代表していたグラスゴー商工会議所では、1834 年と 35 年の 2 度にわたり東インド利害関係者が、商工会議所の名で、東西両インド産砂糖に対する関税の均一化を支持する請願書を議会に提出するように要求した。しかしながら、西インド利害関係者の反対に遭い、最後まで請願書の提出が実現することは無かった。これらの出来事は、当時のグラスゴーの商工業界において、西インド利害関係者が依然として強い影響力を保持していたことを示すものである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 熊谷幸久	４．巻 53巻4号
２．論文標題 書評　川分圭子著『ボディントン家とイギリス近代―ロンドン貿易商 1580-1941』	５．発行年 2019年
３．雑誌名 経営史学	６．最初と最後の頁 52-54頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

１．著者名 島田 竜登編	４．発行年 2018年
２．出版社 山川出版社	５．総ページ数 300
３．書名 １７８９年　自由を求める時代	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考